

されたそうです。重厚で、しかも率直だった、当時の今村先生の姿が思い出されます。

吉田宏先生が事務局長になった関係で、私が「ポーレ」の編集を引き受けましたが、もともと放射線化学が専門の自分には、何のアイデアも浮かばず、毎回編集には苦労しました。次々に新しいアイデアが生まれる、現在の「ポーレ」とは大違いです。それでも 1992 年に函館に転勤するまで続けたのは、ポーランドおよびポーランド人について、忘れがたい経験をしていたからです。

「連帯」運動のポーランドで

1980 年 9 月に、交換教授としてウッチ工科大学に行く少し前から、グダニスク造船所のワレサの活動が注目されていました。ポーランド到着直後に「連帯」が結成され、たちまち百万人を超える組織となりました。共産党政権の下、地下で活動していた多くの組織が一斉に動きだしたようです。政情不安となり、社会は混乱し、共産党政府はグダニスクでの「政労会議」に追込まれました。

ウッチ工科大の職員組合は、地区の連帯組織の中核だったらしく、私の研究の相棒のストラドフスキー氏はそのリーダーだったので、私は革命組織の裏側（といっても、ポーランド語が分からなかったので、その外見だけ）を垣間見ることができました。いわば「前線司令基地」のようなもので、昼夜を問わず会議が開かれ、屈強な労働者風の人たちが連絡に走り回っていました。

ウッチ滞在中は、町はずれにある大学のゲストハウスで、イラクから来たアリージェという若い女性、リトアニアの織物学者アルフィダス、やや遅れてスコットランドから加わった数学者のデビッド、それに日本人の私という、奇妙な組み合わせで3カ月を過ご

しました。日用品をはじめとして、最後には食料品まで店から姿を消し、買い物のため長い行列に加わったり、社会主義国の企業の非効率さに腹を立てたりしながら、それでも助け合って生活しました。アルフィダスの送別会は、ウッチのオペラハウスで行い、ハンガリー産のコニャックで乾杯しました。

滞在中に、鉄道で東ドイツを経由してミュンヘンに行ったときなど、封鎖中だった国境では自動小銃で武装した兵隊に取り囲まれ、難民扱いを受けました。

ちなみにこの2月に、北海道で最初に新型コロナウイルス感染のピークがきたときに、真っ先に心配したのは「北海道封鎖」です。ヨーロッパではこういう場合には、まず境界を封鎖し、鉄条網を張り、武装した軍隊を配置します。私以外にそういう事態を想像した人は、あまり多くなかったようですが。

それから四十年の月日が流れ、ストラドフスキー氏はいったん投獄され、やがて釈放されましたが、ドイツのアウトバーンで事故死しました。アリージェは、イラクに帰って湾岸戦争とイラク戦争を経験したはずです。アルフィダスは、1991 年のリトアニアの独立宣言のあと、首都ヴィルニウスで「血の日曜日」に遭遇したかも知れません。困難な時代に一緒に過ごした、ポーランド人のステファンとはいまでも交流があり、一昨年、彼の長男が北大のラファウさんの研究室にインターン生として滞在しました。

1980 年のポーランドでの生活は短期間でしたが、凝縮された形で当時の世界を体験しました。ポーランドには消滅寸前の本物のヨーロッパを感じさせるものが多く、人々の辛抱強さと親切さは私の故郷の人たちと同じだと思いました。ポーランドから離れられないと思うのはそのような経験によるものです。

(おがさわら・まさあき、副会長・事務局長, 2020.4.13)

ウイルスに
負けない

「ウッジ市日本語スピーチ大会」の試み

吉田 勝一

大阪千里国際高校生たちが、今年2月ウッジの高校を訪問する予定が、突然の新型コロナウイルス感染情報で、1月の早い段階で交流授業中止と決まった。その頃はまだポーランド側は楽観的だったが、感染拡大の波は、あれよあれよという間にヨーロッパ諸国へ広がり、ポーランドで初めての感染者確認は3月4日、ドイツ国境の小都市だった。それから首都ワルシャワのマゾビエツキ県に広がり、南部の炭鉱地帯シロンスク地方に拡大、全地域で

感染者が確認された。

ポーランドの大学は2月後半から後期が始まっていたが、中国、日本はじめ、イタリアなどへの感染拡大を受けて、ウッジ大学は、3月9日から高齢者社会人対象コースを休校、11日から全講義、会議等中止し、大学封鎖措置をとった。寮にいた学生たちは、留学生以外全員帰省し、空いた室の一部は濃厚接触者用の観察保護施設に変わった。



鉄道や航空機の国際便もキャンセルされ、国境が閉鎖された。外出が規制され、薬局、スーパーマーケットなどの商店も、午前 10～12 時は 65 歳以上の者専用、入店人数を制限し、レストランはテイクアウトのみとなり、公共施設が次々と閉鎖された。私は自宅勤務で、臨時便で帰国する留学生への情報提供と意思確認、オンライン授業の準備など、最初の数週間は寝る間もない激務となった。

日本語関係では、3月末に予定のワルシャワの第40回弁論大会、6月大使館主催の日本フェスティバル、7月各国同時開催の日本語能力試験など、さまざまな行事が相次いで中止され、初級学習者を対象に毎年学年末に開催されるウッジ市日本語スピーチ大会も、中止の方向で検討が始まった。

オンライン・スピーチ大会

ところが、コロナウイルスに負けない意気込みを示したい、一堂に会さずに何かできないかと知恵を絞った結果、オンライン開催案にたどり着いた。最初からの計画ではなく、行き詰って生まれたプランで、短期間で準備可能か、不確かな要素が多かったが、若い日本語派遣教師二人の働きで、この状況でこそこできるオンライン大会の実施が決まった。

参加者の出場、発表条件など募集要項は、オンライン参加用に一部基準を作り直し、3分以内の自撮りビデオを、参加者本人が主催者に送ることになった。応募作品の流出・改ざんを防ぐため、クラウド設置、応募者専用アカウント、パスワードなど、事前の確認作業が増えた。ワルシャワの弁論大会のように日本語の文法、運用能力、発表テクニックを競うのではなく、「各自のレベルで日本語発表を楽しむ」という本大会の趣旨から、参加者はそれぞれ緊張の中にも、ビデオの自撮りを楽しんだようだ。

応募ビデオは主催者で一括管理、6月8～14日の間に2ステージに分け、全参加者にオンライン配信、各自コメントシートに感想を記入してもらい、オーディエンス賞を決めた。審査員は、ポーランド内外派遣日本語教師、日本国内にいる今後ポーランドに派遣される、あるいはかつて派遣された日本語教師 16 名に評価をお願いした。評価基準は、正確さ(5)、イントネーション(5)、流ちょうさ(5)、発表熱意(10)、独創性(10)、合計 35 点で、発表者一人の総得点は 560 点満点、大会の趣旨から「発表熱意」と「独創性」を他の項目の倍(10)とした。

このスピーチ大会では、これまでウッジ大学日本人留学生たちのポーランド語スピーチ発表も並行して行い、言葉の交流をしてきた。今回は、日本人留学生は帰国してしまい、オンラインの呼び掛けな

ら、ポーランド国内在住日本人や日本のポーランド語学習者にも呼び掛けたらと話が広がり、北海道ポーランド文化協会にも案内をお願いした。審査は日本語スピーチと同じ条件、同じ日時で日本、ポーランドの専門家3名にオンライン審査をお願いした。

最終的な応募数は、日本語スピーチ 49 名、ポーランド語5名と、過去最多になった。試行錯誤の連続で多くの課題が残ったが、私たちは企画してよかったと評価している。というより、この感染拡大の条件下で、ここまで出来たのは、参加者の皆さんの、パンデミックに負けずに生きていこうとする、ビデオを通じた主張に力を与えられたからだ。

応募作品の中には、パンデミック規制で家族の許に帰れない、学生の今の気持ちを日本語に込めたものや、有効な生活実践の紹介があり、日本語で(ポーランド語で)自分の気持ちを伝え合うことができた。参加者のスピーチをお伝えできないのは残念だが、入賞者氏名と発表テーマを、一部紹介する。オーディエンス賞は参加者投票で選んだ。

【日本語発表部門】

日本センター梅田賞/オーディエンス賞「点滴穿石」 Aleksandra Stasiak (諦めずにコツコツと努力することの大切さー学生、4月から秋田国際教養大留学予定が、コロナ規制で断念、その思いをスピーチに込めた)

ウッジ考古学民族学博物館館長賞「私の趣味」 Izabela Matczak (バイトして買ったミシンで、環境保護を考慮した服飾制作ー学生)ほか

【日本人ポーランド語発表部門】

ウッジ考古学民族学博物館特別賞 Co czułam podczas studiów za granicą 長谷川溪冬(留学して感じたことを発表ーポーランド留学生)

このほか、賞にこそ入らなかったが、どの発表作品も、熱い気持ちが伝わってきた。

その後、ポーランドのコロナウイルス規制は大幅に緩和され、マスク着用義務も入店時のみとなり、平常の日常生活に戻ってきた。それでも7月 31 日現在、コロナウイルス感染者数 657(累計 45,688)、死者7(累計 1,714)と日々感染者が続出、予断は許されない。10月の新年度から、教室で対面授業が行えるか、オンライン授業を継続するか、まだ決定できない状況で、留学生の受け入れ・送り出しは、当面見送りとなっている。

しかしどんな状況でも、日本に関心を持つポーランドの学生たちは、日本語を学ぶ熱意を失わず、その熱意に支えられ、日本語教師スタッフも、この地で教鞭をとり続けている。(よしだ・まさかつ、

ウッジ大学日本学専攻講座主任/(法)梅田良忠 教授記念ポーランド日本教育文化センター代表)